



自尊心感情

◆学校教育の不易をまとめた「**はむらの学校教育**」の基盤には、「望ましい習慣の形成ー社会の形成者としての基盤づくりー」と「**自尊心感情の醸成**」を据えています。

◆自尊心感情は心理学の用語で、self-esteem の訳語です。**自分を価値ある存在として捉える、すなわち自己を肯定的に評価する感情**のことです。



◆自尊心感情が全ての教育を左右することは、教育の主体に学習者を位置付け、「**教育とは、学習者が教わったことを生かして自ら育つ営みである**」と捉えると、合点がいきます。さらにここでは、人権教育に焦点を当てて考えてみましょう。

◆人権教育を進めるには、「**人権尊重の理念**」を学校全体に定着させる必要があります。「人権尊重の理念」とは、「**自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること**」です。注目すべきは、**私たちが他の人の大切さを認めるには、程度の差こそあれ自分の大切さを認識していること、つまり自尊心感情が育まれている必要がある**ということです。仮に、「自分は価値のない人間で、どうなってもいいんだ」と自暴自棄に陥っていれば、他の人の大切さを認めることは極めて難しくなるはずです。

◆「はむらの学校教育」には、子供たちの自尊心感情を醸成するに当たり、大切にしたい実感を記述してあります。「**やればできる**」、「**伸びている**」、「**役立っている**」の三つです。子供たちが学校、家庭及び地域社会で、これらの実感を抱くことが自尊心感情の醸成につながります。

その人間に見合う成果

大リーガー 大谷翔平

ちゃんとした人間に、ちゃんとした成果が出てほしい。どの分野においても僕はそう思っています。

出典：「大谷翔平は、こう考える」（桑原晃弥著 PHP文庫）

大谷は花巻東高校時代、野球部佐々木監督の「球場の一番高いマウンドに立つ人間は、みんなが一番嫌がる仕事をしなさい」という教えを守り、寮のトイレ掃除を文句ひとつ言わずにやっていたそうです。